

■ ODAKYU VOICE

ODAKYU Town FileNo.33 成城学園前

■ 緑蔭館ギャラリー

柳田國男のご家族が住む邸宅の一部が貸画廊になっており、シンプルでどこか懐かしい空間が展示作品を引き立てます。



世田谷区成城6-15-13 電話 03-3485-4355 (柳田宅)

開館時間 展覧会開催時のみ開館

■ 柳田國男と成城学園との親交

成城学園の父兄として

当時牛込加賀町に住んでいた柳田國男は、大正10年秋からご長男の為正氏を近所の成城小学校に入学させる。為正氏自身も自著『父 柳田國男を想う』で、「澤柳政太郎博士は、隠れもなき長野県人、旧松本藩の御出身ときく。大正初年、父が貴族院書記局づとめの当時、同先生には貴族院議員、また文部省の最高頭脳の一でであられ、とくに国語問題で進歩的な発言を続けておられたようだ。大正六年、先生が官を去って独自の実験学校を市ヶ谷原町に創立されたのは、父の(貴族院書記官長) 辞職・下野の二年前だった。同十年、学齢期に達した不肖の入学先としてこの学校が選ばれたのは、両親はのちのち『電車通りを横切切らずに徒歩通学ができる』という安全第一の点を強調していたが、実は澤柳先生への信頼と期待とがあつてのことと察せられる。父國男にとっては年齢からも大分先輩に当たるが、いわゆる『薩長』勢力がいまなお中央官界を牛耳っていた当時として、非主流官人キャリアーの先導たる同先生は、骨の髄まで開明派的な日頃の発想と併せて、父の信頼する御人だったはずである。(中略) そのころ何かの式日に父が珍しく同行したのには理由があつたが、たまたまその小田急電車内で、礼装姿の澤柳校長と御一緒になったときの、さすがの父の立礼のおのずからなあらたまつた鄭重さだけが、いまも印象に残る。」と述べられている。

柳田國男の教育観

敗戦後は、社会制度・教育制度ともに大変革を余儀なくされた。国定教科書が検定教科書となり、新たに「社会科」という科目が実施されるようになった。この戦後新教育は、「アメリカ的な民主主義社会の建設」を理想像とし、これまでの日本人が精神的拠所としていた社会伝統を「封建遺制」として否定する傾向にあった。

そうした風潮に対し、柳田國男は戦争に至った教訓から「民衆に疑問を持たせ、賢い判断力を養成する」教育の必要性を説き、他国の物まねでない自国の歴史や民俗伝統に根ざした社会の建設を考えた。そこで古稀を越えていたものの柳田は、「民俗学を現代科学の一つにしなければならぬ」(「現代科学と言うこと」昭21.9講演)と決意する。そして未来を担う子どもたちの教育、特に国語教育・社会科教育に対して積極的に発言し、情熱を持って取り組んでゆくのである。

昭和23年5月に東京書籍の教科書「新しい国語」の監修を引き受けたのだが、ともに編集委員をした大藤時彦によると、「教材の選定や取材範囲などについてもいちいち具体的に指示され意見を述べられ、熱意を持って教科書の編集にあたられていた」という。また柳田の主張した国語教育の目的は、「よき選挙民をつくりあげることで、選挙民として候補者のいうことを的確に判断する能力と自分の考えを率直に他人に表現できる力をつけることが肝腎であると常に述べられていた」ともいう。

国語教育の方向については、自著の『国語の将来』、「国語史の目的と方法」、『西は何方』等で、「これからの国語教育は、読み書きの教育に偏らず、まず聞き方から始めるべきとし、話す力をつけさせる方向で、教える者も教えられる者と共々に更に多くを学ぼうという心掛けが必要」と教師達に望んでいる。社会科教育についても国語教育同様、「疑問を持たせる教育」を念頭に「史心を持った選挙民」の育成をはかることに重点をおいたと大藤時彦や庄司和晃、その他関係者が述べている。そのためには、今までの歴史教育がやってきたような、質問を封じて聞き馴れない名前や年月を詰め込む方式は改めるべきとした。

■ 大岡昇平 成城だより



風の旅人



■ 大岡昇平 成城だより

大岡昇平晩年の日記。成城に越して来て11年、運動は駅まで15分の片道だけ。体力の衰えに抗しつつ、富永太郎全集に集中、中原中也「山羊の歌」の名の由来を追い、ニューミュージック、映画、テレビ、劇画、広汎な読書、文学賞選考会等、80年代前半の文化、文壇、世相を組上に載せ、憤り、感動する。70歳にして若々しい好奇心と批評精神で「署名入り匿名批評」と話題を呼んだ日記体ウッセイ。上下2巻。

成城の町の描写も多い。

< 駅前 のそば屋 >

「八日 土曜日 晴、暖かい日続く。昼食のため駅まで散歩。ザル一枚。駅前には古きソバ屋があつたが、そこは昨年よりホットドッグ・セルフサービス店となり、地下に少しうまい別のソバ屋できる。一四時でも一杯。女の子一人のサービスで、おそくなる。客には私のような老人、中年者多く、「シルが足りないっていつてるんだよ、早く持って来い」など大きな声を出す者あり。中老年は醜きかな。」

< マダム・チャン 飯店 >

「花便り 四月三日 木曜日 晴、平野謙の三回忌。ただし先月末、埴谷雄高より電話あり、「近代文学」同人だけにて行うとのこと。生前は退院祝などに成城より水上勉、大江健三郎と私が参加し、成城南口のマダム・チャン飯店にて飯を食う慣しだったが、こん後、成城組は一括排除する由。喜多見の平野邸にて仏事を営みて後、やはりマダム・チャンに行くが、夜に入るから、病身のお前は風邪を引いてはいけなからよせ、成城組は全部呼ばないことにするからひがむなどの断りなり。」

< 成城堂書店 >

成城堂書店は成城大学の丁度正門前にあります。「成城だより」では度々出てきますが、下巻では「五月一日 水曜日 晴、暑、24. 7度。2度寝。「堺港擾夷始末」40枚。午後3時半、中公高橋君に渡す。遅々として進まず、三回にして計150枚弱。やっと2月15日の事件前夜、土佐藩堺 … レコード店「ポブラ」に寄り、初期ロック「村八分」などの復刻売り出しありとのうわさを確かむるに、なし。アシケナージのモーツァルトのピアノ・コンチェルトK482を買うに終る。大学前の成城堂にて、偶然目につきし『フィリッピン の民間説話』(M・G・コール、荒木博之訳、岩崎美術社)を求む。民俗民芸双書の一にして1972年初版、1980年の第三版なり。案外売れている。…」

< 伊勢屋 >

「九月八日 日曜日 晴、娘と息子、〇九〇〇来る。日曜なれば正午ごろまでに成城に帰らないと道がこむ。荷作りは完了しあり。老妻と娘の車は、入間町三船プロ附近の神戸屋のパン、仕入れて帰る。ついでに伊勢屋のアンコロ餅と大福を買って来るのがいけな、糖尿病患者には毒薬と同じ効果を有す。…」

< 水上勉宅 >

「…新しい家は、成城六丁目でも小田急線駅に近く、歩いて三、四分の場所が気に入ったのと、先にも述べたように、ホテルや旅館で仕事をすくせになっていた私には居宅に執着する理由はなかったのだが、こんどの家は庭も広くて階下四部屋、二階二部屋の間取りも気に入った。しかし、成城と聞くと、高級住宅地のイメージがつよく、「おれも偉くなった気がするなあ」といった怖じ気も生じないとはいえなかった。… 一つは大岡昇平氏の訪問であった。実証派で、しかも成城のことには詳しく先生は、桜の下にどれどれと佇まれ、「なるほど、らいてう邸の庭続きだ」とおっしゃったことから、その桜を「らいてう桜」と我が家では呼ぶようになった。…」